

Y-37

演劇脚本上卷

五大力戀緘

金門五三桐

版權所有  
興行權

合二册

088550-000-9

特52-582

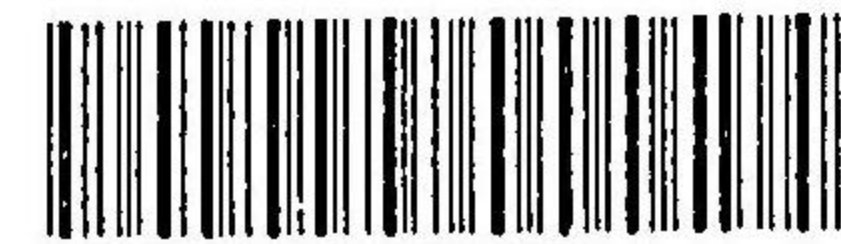
五大力戀緘・金門五三桐

上卷

並木 五瓶/著

M22

DBJ-0209



Y-37

演劇脚本上卷

五大力戀緘

金門五三桐

合二册

版權所有  
興行

特52

No 17709/21

582

五大方懸鐘  
序幕

洲崎武藏屋の場

陸摩源五兵衛

箱廻し彌助

千島千太郎

藤原宅左衛門

近習 伴右衛門

同 軍藏

同 伊平太

同 郷藏

同 鷹入

同 土手助

武藏屋金五郎

料理人 喜助

魚賣 市助

中間 せぶ六

深川藝者小万

武藏屋女房お民

仲居 おと日

ためみ持久女吉

同 金吉

同 富治



本舞臺深川洲崎料理店武藏屋表掛りの体賑やか成唄にて幕明く

ト唄に成り向ふより千太郎袴羽織若殿の拵へ此跡より三五兵衛源五兵衛伴右衛門諸士四人宅左衛門何れも袴羽織大小銘々に奴一人宛箱提灯をともし附出て来る門の内より女房お民出迎ひ(お民)是のく何れも様に毎度乍御入下さりまして有難ふ存まざる憚り乍是よりお通り遊ばされませう(三吾兵衛)チ、女房此か御案内申せ(お此)畏り升た(源五兵衛)千太郎様にいイヤ(千太郎)チ、皆来い(ト)千太郎皆々門之内へ遣入る(三吾)源五兵衛との宅左衛門との(兩人)まづ(ト)互に目禮して三人門の内へ遣入ると此道具廻る

本舞臺武藏屋廣座敷の体矢張前の唄にて道具留る

ト向ふより箱廻し彌介走り出て来り直舞臺へ来る茲へ奥より料理人喜介出て(喜介)チ、彌介とんかどふした(彌介)アイ野花屋に客人が来てゐるから鳥渡顔を出した所が井で一ツぎうとイヤモウ飛た目に逢ふやつト此内奥おとわ今の手紙を持出て来り(おとわ)彌助とんさつぎから待て居たわいな小万さんが云しやんとに此文を以ていて太義乍内へ届けて来て貰ひ度と言しやんしたぞ(彌)夫のお世話でございやした此文を以て内へ往て来てくれとアノ子に色がましい事いなし何だしらんと合点の行ぬこなしにて文を開き見て(彌)今夜の歸る程に何となく取繕ふて貰ふて下さんせ急度(彌)頼むぞへ彌介とのへ小万からア又何ぞアノ子の疳癩に障つたかしらん(おとわ)おとわせんわしや一寸内へ往つて来る程に此通を

小万さんへ頼みませど(おとわ)そんなら歸てござんすかそりや太義じや(彌)何の茲から中裏迄いくら有物か(喜)一走りト佃に成り向ふへ走り遣入(とわ)ドレ私より小万さんに此様子を咄して来やうか(喜)おとわとんモウお吸物が出るによ(とわ)合点じやわいな(おとわ)奥へ遣入喜介の下座へ遣入る踊り地まで奥より伴右衛門先に四人の近侍お此と小万を連出て来り(五人)兩人共に一寸来やれ(小万)お前さんが私に用と仰しやるの先度からお此さんが言しやんす三五兵衛さんの事か(お此)小万さんおなた方迄色々に仰しやる事じや程にとふぞよいやうに返事してお呉れなさんせいな(万)サアお前が段々言てじやけれどとふも成らぬ譯が有故(伴右衛門)とふも成らぬ譯といふの小万外に色が有といふのが(近侍)仲町で聞合せた所がそちに計りの深間の無いとの事(△)今時の藝者に珍らしいと聞及んで居る(口)我々も三五兵衛殿に頼れた手前(×)小万コリヤ是非共に返事が聞度(万)サア此事いどんな事が有ても言ふまいと思ふたけれど言ねば三五兵衛さんへお前さん方やお此さんが済ぬと有ゆへ言ふ程に三五兵衛さんの腹の立ぬやうにして下さんせ(此)そりやもう私が呑込で居升をうしてお前の色さんの名の何と言うへ(五人)早う聞して呉れい(万)サア其お方の(五人)其お方の(万)千編のお屋敷薩摩源五兵衛さんでんんそわいな(皆々)ヤアト皆々憐れする茲へ奥よりおとわの出て来り(とわ)モウ(おとわ)おな方がお見得なされぬ連千太郎様がお尋ね遊ばしてござりませるサア(とわ)ちやつとお出になされま

せいなア(伴右)千太郎様がお召とござれば参らまは成まじまい(○)此様子を三五兵衛殿へ  
 (△)そりや間を見合せての事に致そう(○×)キア(先)お出なされいと合方に成り五人具  
 (遣入)此)コレおぞわおまへ一寸源五兵衛さんを呼でおじやいのう(とわ)アイ(私)がそ  
 んならト行ふとぞる(万)これ(お)とわぞんマア今の事の何にもいはずに置いて下さんせへ  
 (とわ)アイ(合)点じやわいなアト流行唄に成り奥へ遣入小方こなし此時奥にて(源五)何  
 芝からの使との何用じやしらんと言乍出てお此芝から身に逢たいと申て参つた使のどれに  
 居るぞ(此)ハイ芝かっのお使の(源)どれに居るぞ(此)ハイお使でござりますぬわいなア  
 (源)何を言ぞいやい○是の小方先程から座敷に居らぬが何をして居るぞ千太郎様を始三五  
 兵衛殿もお尋ねなぞつた奥へ行きやれ(万)ハイ参りの参りますふがお此さん今のをナ(此)  
 其ア今のをなト小方に言へといふをこなし(此)ホ、(万)ホ、(兩人)ホ、(源)何の事  
 じや左して可笑くもない事を○エ、芝の使との立廻り廻つて居るかレト奥へ行ふとする  
 をお此源五兵衛が袖を扣へ(此)ア、モシ○其使の小方さんお口上を聞いていござりまする是  
 いなア茲へ来て今の口上をどつくりと言しやんせいなアト小方を源五兵衛が方へ突さ遣る  
 (源)フツとりや小方が其口上を承つて居るか何の用じや早う其口上をト小方思入有て源五  
 兵衛が傍へ寄り(万)其口上はアノそれ○頼まれてお呉れなさいませ(源)其口上は頼まれて  
 お呉れなさいませトハそりや何の事じや(万)其譯はア下居て聞とお呉れなさいませいナト合

方に成(万)奥へ来てござんとアノ三五兵衛さんが何じややら私に惚れたの何のと言ふて口  
 説しやんぞけれとどふいふ事じややらわたしや三五兵衛さんがいやせ(成)ぬわいなア夫  
 で今迄断り言ふても茲にござんとお此さんや奥にござんと伴さんや佐十さん迄頼んで退引  
 成ぬ今宵の切迫得心せぬの外に深ひ色でも有やうに問詰られて詮方なさ如何にも深う譯の  
 有お方と言ふの源五兵衛さんでござんすと申ました故一生の御恩に着まを程に皆さんの手  
 前にお願ひ申た様に譯の有体に見せて下さりませモシお願ひ申ませるわいな(源)芝の使  
 ひのハテ替つた口上じやナ小方の言ふても藝者の事跡先の辨へなく只今の様な義を言出そ  
 ふともお此迄が同じ様に益体もあいな事を言出し何は表向でも内向でも身共の大切なる御用  
 を蒙り此江戸表へ下り居る身分殊に簡様な不義密通の義侍に有まじき事惚たの色じやのと  
 馬鹿々々しい(此)夫見やしやんせ大方斯で有ふと思ふたわいな小方さんお前を仕様と思  
 ひしやんと(万)せふせうといふて頼みに思ふた源五兵衛さんかいやじやと言ていござん  
 と詰らぬ者に成たわいなア(此)詰つても詰らぬでもトこなし源五兵衛向ふを見て居る(此)  
 とふも仕様がよいわいなア(万)ないで済ぬわいなアトうち(と)るお此源五兵衛に指し  
 て頼めといふ思入(此)済ぬわいなアト種々氣をもむ小方こなし有て(万)私が身の切なさに  
 源五兵衛さんの御身に心も付きひよんな事を言出して嘸お腹が立升うがそをどふぞ堪忍  
 して今宵た様に表向之所のまア色じやと言てお呉なされば能のでござりまする程に藝者へ

人り助けると思召てモシ表向計りの色に成て下さんせいなア(源)表向ばかりの頼みじやの  
 (方)アイそふじや(源)重ねての聞ぬぞト奥にて(三五)お此や〜お此のとれに居るト言ひ  
 出て來ら三人思入有て三五兵衛お此を見て(三五)お此是に居るか最前から尋ねて居つ  
 た源五兵衛どのも是にゐるかホウ小万も是に居つたかト小万源五兵衛へ思入(源)イヤ三五  
 兵衛殿御存の通り拙者一醉もたべませぬ故若殿様がお好の粟盛をしい付られて甚酷町漸く  
 醉を醒そふと存不禮の段の御免下されい(三五)成程御酒の參らぬか手前粟盛の御難儀でム  
 つたらふが然し下戸でも婦人の方の御同様嫌ひな事のごさらぬの(源)コリヤ當りました  
 が定めし御身も御執心がらふの(三五)イヤござる共〜其執心な文子のな實は是も居る  
 小万坊でござる(源)ハ、ア扱の貴殿の御執心と申の則小万でござるかいよ〜茲な色男め  
 (三五)おだてさつしやるなく所で彼女の意地の強ひ奴で様々と口説ともども手に乗  
 まとぬて(源)そりや其等の事がらる彼めい乾と致した間夫がござる貴殿の御存じないのか  
 (三五)イヤ〜彼が事の當所深川の勿論吉原高輪迄も聞合せました所が色のいの字もない  
 と承つた故(源)然らば御咄申そふ小万めが深間といふの面目ないが身共でム(三五)エ、  
 ト悔りする源五兵衛扇にて顔を隠す小万嬉しきこなし(三五)スリヤ小万の間夫でござるか  
 (源)三五兵衛殿御免されい拙者余程たべ酔まして何を申たやらと存せぬ此上の御免  
 と榮りて酔を醒したいサア小万いつもの様に介抱を頼む〜唄「アレ虫さへも番ひ放れぬ

揚羽の蝶ト小万の手を引源五兵衛上の方へ行三五兵衛小万が扇をとらへて(三五)源五兵衛  
 愈小万の(源)番ひ放れぬ我々三人(三五)スリヤアノ兩人の(源)三五兵衛どのト小万を上手  
 へ引廻そ(三五)ム、(源)後刻ト唄に成り源五兵衛小万が手を引上手の障子家体へ進入跡よ  
 三五兵衛奥を見て居て口惜き思入お此と顔見合せ煙草を吸付るお此こなし奥より伴右衛門  
 先に四人の近侍出て來り(五人)三五兵衛どの(三五)何れも(伴)様子いわれにて承つた(○)  
 愈アノ小万めい(五人)源五兵衛どの(三五)何れもお聞の通り面目次第もござらぬ(伴)三  
 五兵衛どのコリヤ御思案(五人)なされずば成ませまいト向ふより彌介文を持戻て來る(彌)  
 とふぞ座敷の工合が能ればよいが○おとわどん〜ト呼乍奥を見て居る(伴)見れば文を持  
 て居るが何用有て參たのだ(彌)ハ、此文の小万さんへ急な用が有て參りました(伴)ム、小  
 万に届るのか(彌)左様でござりまするト文を伴左衛門に渡と直に三五兵衛が傍へ持行三五  
 兵衛上書を見て封を切る彌介悔りして(彌)ア、モシお前さんが御覽じてハト寄るを(五  
 人)贅ましい下らぬか〜(彌)夫でもお前さん(五人)慮外ひろくと打放そぞト彌介仕方な  
 くこの〜つふやき此内諸士文を開き(○)急き申入候我事今晩の殊の外氣分悪く候間お此  
 さんへ断り申座敷の首尾悪からぬ様として此文届次第早く御歸り待入參らせ候可祝小万の  
 のへ母より何と何れもお聞おされたか(五人)いかさま怪しい狀でござりまする(△)母親が  
 病氣といふの偽りちつとも早う歸らふといふ小万めが拵へ狀で有ふが(三五)小万が客と

いふ此三五兵衛だ母親が病氣で有ふが手こねよふが今宵中の歸を事の成らないるふ思つてうしやアがれ(彌)そりやアお前様御無理と申者でムりまざる何ばお客が大事でも親の病氣を辨わきに座敷が勤て居られませうか其様な事仰しやりませすと私が申事も聞てお呉なされませ(口)ぬかそ事が有なら茲へ来てさういぬかせ(五人)早く茲へうせら(彌)そよを侍様が立はだかつてお出なされまして(ト)真中へ出て(彌)譯と申の外でござりませぬマア小方さんの評判の石部金吉是迄方々のお客が色々仰しやつても其方の大嫌ひでござりまざる源五兵衛さまの元よりアノ子に心を掛る杯といふいや味な事なござりませぬぞふ言ふ事で源五兵衛さまと譯の有様に仰しやりませするな(三五)譯の有といふ小万源五兵衛が口からかやうに只今ぬかした(彌)エ、そんなら小方さんと源五兵衛さんとがこりやとんだ事だト呆れるこなし(三五)然らば其方實正しらぬか(彌)ハイ(三五)彌介とやら必庭見へた一ツ呑め(彌)ハイそりや有難ふござります(三五)伴右一ツついで遣され(ト)彌介捨せりふ有て取上る伴右衛門つゝ彌介こなし有て吞む三五兵衛紙入より小判を出して紙に包投て遣る(三五)ツレ取て置(彌)こりやお金(三五)小万を取持骨折賃(彌)左様ならあなたも小万さんに(三五)うつこん惚れて惚抜いて居る此三五兵衛是迄様々口説たれど承知せぬこそ同理くされぬいて居る兩人とふも身共武士が立ぬ小万を身共に取持たばまだ其上に如何程でも金子を取らして遣(彌)能ござりまざる源五兵衛を切させて小万さん

を取持ませう(三五)通れ出かした小氣味の能奴ト是にて道具廻る

本舞臺同家座敷續の体茲に若殿千太郎宅左衛門くめ吉金吉おとわの三人此下手に伴左衛門始め近侍四人富次升吉踊ッて居る件にて道具留る

ト奥より三五兵衛出て来り(三五)ハッ誠に中座仕り失禮の段具平御免下されい〇源五兵衛殿も是に居ませぬかな(皆々)左様でござる(三五)源五兵衛殿の何れにお居やる千太郎様のお召ソレ何れも(皆々)源五兵衛どのくト口々々呼立る下の方障子の内より(源)ハット出て来る下の方へ平伏するト此内源五兵衛の出た襖の内より小万出て来てそこらを見廻し能所へ住ぶ皆々是を見て(五人)見付たぞく小万とちやせれへ参つた(万)わたしやせつこいも参りの致しませぬ(三五)小万左様じや有まいどれへ居ておつた有様に言へ〇ハッ千太郎様有様に申させませうか(千太郎)ナ、申させいヤイ小万コレとちやせれへ穴ッ這入を致して居つた有様にいへ言ぬと粟盛で言とぞト大きなるこつと小万が前へ置小方むつとして小粒を取上る(源)イヤ何いづれも小万がお座敷を明ましたのかうでござる拙者暫く酔眠の間介抱頼みました故お座敷の事を斯申譯なき時宜彼めが不調法の拙者に免じられ何とぞ御用捨(三五)ア、スリヤ小万が詫言のそこ元がさつしやるかハッ替つた所から御挨拶でムるナ(〇)源五兵衛どの御深節な義でムる(皆々)ハ、ハ、(三五)イヤ千太郎様此小万が義如何取計らひ升うな〇ハッ然らば其通り申付升う何小万是にお出なざる、千太郎様いつぞや

り其方を甚御執心御大身様に身を任とひそら達が果報と言者有難ひと思ふてお伽を申たが能何とお伽がよふり升るか(万)御大身で有ふがお大名で有ふが人と言者の心意氣計り愚かしい千太郎様をたらし込三五兵衛さんお前ひまアさもしいと言ふとして源五兵衛と顔見合せ源五兵衛せきばらいしてちらす(万)イヤさもしい藪者の私に御大身様との釣合ぬわいなア(三五)すりや愈千太郎様のお心には随わぬか(伴)言ふ様ない悪いやつめト皆々立懸る(千太)悪い段か小方を横取した源五兵衛皆寄て叩いてやれ(三五)何れも千太郎様の御意じやぶちのめさつしやれ(五人)ハッ○御意じやト源五兵衛を皆々扇にて打すへる源五兵衛ちつと堪へて居る小万取付(万)源五兵衛さん思ひ掛ない此様子斯う成るとい露まらずよしない事をお頼み申てト言ふととるを引付て(源)こりや何にも言な言譯とらも斯成ぬ先の事一旦武士が頼まれたらば邪でも悲でも立通とが千嶋の家の國風だハヤイ(千太)ヤイ源五兵衛 事の用向を蒙り乍散々の身持國への遠慮身が目通りハ叶わぬぞ(万)らんなら源五兵衛さんの(三五)御前へ叶わぬ(千太)是から奥へ往て藝者共に三味線を弾せて我等ハ踊りと出かけよふ(五人)是ハ一興でムリ升う(千太)サア皆来やれ(三五)御前の御意じやサ、御意を申續ぐ此三五兵衛逆もの事には是も御意じやト扇にて源五兵衛を叩く小万源五兵衛思入三五兵衛じろりと見て(三五)ハ、ト唄に成り此一件不殘奥へ進入跡合方源五兵衛と小万殘る此時障子の内よりお此出て小万を扣へ(此)最前からの様子ハ皆聞たわいな小万さんト源

十

五兵衛へ思入有て氣の毒な者に成たなアそふしてまア此仕舞のとふせうと思ふてじやエト此内小万思入有て邊りの枕を取て來り刀掛の源五兵衛が刀を抜指を切る兩人怖りして(源)是ハ何事を致した(此)痛みのせぬかいなア(万)イエ、ト大事をいわいなア○トこなし有て指を取紙に包み源吾兵衛の前へ置(万)コレ取て下さんせ(源)ハ、最前頼んだハ偽りなれど其禮の官様がなさに指迄切て(万)アイお國にハれつさとしたお嫁御様の有事を聞て居升けれど江戸にお出なさる内ハせめて私を女房にイヤ女房ハ有に依て飯焚とも思召とふぞお伽に置てモシ(源)今迄ハ主持今宵から浪人の源吾兵衛盟の晝迄ハア、儘よト思入あつて立上る小万うれしきこなしにて顔を隠そを木の頭佃の唄にてよろしく

ひようし幕



金門五三桐  
四立目

此村屋敷の場  
庭内唐館の場

- 一 此村大炊之助
  - 一 小早川高景
  - 一 奴 矢田平
  - 一 羽柴久次
  - 一 同 久秋
  - 一 奴 四人
  - 一 花四天大勢
  - 一 局
- 一 傾城九重太夫
  - 一 此村妻具竹
  - 一 こし元柳葉
  - 一 非人蛇骨婆ア
  - 一 實の岸田の局

本舞臺此村屋敷庭内の体奴矢田平手枕をして寝て居る此傍に傾城九重を奴四人にて割竹を  
持つつゝ、實の体にて幕明く

(矢田平) エ、やかましいまだ責を引ぬかい。〇九重どのも九重どののまだ返事をせぬのか  
(奴四人) 如何にもまだ返事を仕升ぬて(矢田) ちがは且那大炊之助様此間預つて戻らしやつ  
た久次公其九重に心を掛口説ても得心せぬ故怪我のない様に責いとの言付そこで此現責此  
間から責てもく返事とせぬのまふとい根生是からの此矢田平が替つて責よふ其内わいら  
の部屋へいつて一ト寐入やらかせく(奴四人) そんならちつとの内体足しても大事ごんせ  
ぬか(矢田) ハア早く行といふに(奴四人) そんなら役を替りましたぞよト割竹太鼓を引提げ  
捨せりふにて奥へ這入(矢田) 九重どのの皆の奴等の遠さけた此間にちつと氣を落付てねむら  
つしやいと是にて九重思入有て(九重) 矢田平どの、志婿うんを夫に引替胴欲な久次様現  
在の弟御の久秋様と言替した此九重に無寐の懸幕刺へ殿様にも連れぬ様に成るといふの本  
に幸氣な身の上じやわいな(矢田) 成程尤な悔じやが死で花實が咲升るか身を捨ててこそ浮む  
瀬も有事といふでないか殊に九重どののこなたの此下郎が兼々執心コレとふして呉る心  
ないかどふだく(九重) サア矢田平どのの志の婿うんを夫が此事計りの堪忍して下さんせ  
いなア(矢田) 堪忍せいといのそりや胴欲なコレそふ首きとも一寸ト首色よい返事を(九重)  
夫じやといふて(矢田) エ、是どふぞト矢田平の九重を引寄しなだれる捨せりふにて色々

廻る管弦に成り興より久次壺折衣裳にて貳重舞臺へ出て来り(久次)矢田平く、ト此聲に兩人悔りして(矢田)ヤアあなた(九重)久次さま(久次)シテ九重の色よい返事と致たか(矢田)サそれト捨て有る割竹を取て(矢田)今以て返事仕升ぬ夫故唯今も責まざる此九重下郎めが責まざるをわつちこつちと遊まざる故唯今のしだら一向返事仕り升ぬ様にムリ升る(久次)ハテ扱えふとい女郎めだあコリヤ九重斯迄心を盡す此久次に一度の情も懸ぬといコリヤヤイ情を表となす傾城の常そりや我つれないぞよ(九重)浮川竹の賤しい此身後からぬお志有難ふのムんそがアノ久秋さんとい深う言替した中なれば御返事の成升ぬ夫知乍口説しやんそあなたが強面ない御方でムんすわいな(久次)スリやどふ有ても久秋に心中立此久次にの廉かぬ心か(九重)まだ此上にどの様な憂目に逢ふてもいやでムんそわいな(久次)しぶとい女郎め其儘に捨置ふか矢田平打そへて返事をさせい(矢田)畏りました(久次)夫を看に一献汲んたを銚子盃をもて(吳竹)畏りましたト合方に成り此村妻吳竹襦衣裳にて三寶に盃を乗せて腰元一人長柄を持出て来り下に扣へる(吳竹)仰せに任せ此村が妻吳竹が盃持参仕り升たわいな(久次)盃是へ(腰元)ハット久次が傍へ三寶長柄を持行久次盃を取上げ(久次)サア矢田平酒の肴アノ九重殺敷責めて返事をさせい(矢田)畏りました(吳)矢田平待やイヤ何久次公此程よりの現實疲れましたるアノ九重其上手荒い拷問にて若もの事が有勝りあなたをお預り申ましたる夫此時此家に於て九重世のに凶事有てハ久吉公への聞

へ此儀の只音お止め申まするわいな(久次)面白いとちに九重を預け遣わとどの運色よい返事と早く(吳)致させまざるでござりませう(久次)然らば興にて返事を待ん(吳)矢田平次さまへ(矢田)ハア(九重)吳竹さま(吳)マアござんせいな(久)興で返事をとりや待ふかト皆々興へ道人此時向ふト久秋公壺折衣裳にて簪を着て出て来り舞臺へ来て(久秋)そこに居やるハ吳竹でハあいかト吳竹見て(吳)ヤアろう仰しやるハ久秋公どふしてマア是へハお忍び成されたといな(久秋)此久秋が忍び来りしも九重が此館に責苦に逢ふて居やるとの噂夫が一ツの心掛り彌々久次殿の計らいにて九重の責に逢ふて居やるか(吳)成程兄上の邪故九重殿の思ひ掛ない此場の難義去り乍お氣遣ひなされまとな九重どのにハ此吳竹があなたをお逢せ申ませうわいな(久秋)イヤ、某此所へ来りし事兄君お聞有ば亦此上に九重が身の妨げとも成ん(吳)サアそりや兄君へ知れぬ様に私が能やうに致しますト興の方へ向ひ(吳)腰元柳葉九重世のを是へ伴なや(柳葉)畏りましたト合方に成り柳葉九重を伴ひ伺ひ乍出て来る九重久秋を見て(九重)ヤア殿さん久秋さまヨウマア来て下さんしたな(久秋)コリヤ聲が高ひ某尋ね来りし事兄君がお聞有てハそなたもわしも爲に成ぬ何時ぞや別れし其日より尋達んとい思へども此家の主此村が思ふ手前といハ殊更お心証さ久次公若も知れなば返つて二人が身の難義と妻をやつし近習の者も召連れず漸々是迄忍び来たのじやわいのうト向ふより乞食聖の拵へにて出て来る是に葛蒲草の侍二人棒を突下れくと

留て出て来る(侍)下れく下りおろふ(吳)コリヤく騒がしい何事じやぞいの(侍)へい  
 く御覽なされませいかやうな賤しい婆アめが御門内へ断もなく通りまそる故我々が制し  
 升るのでござりまそる(神)はんに見ればさもしい非人うなたのお庭先へあぜに來やつたの  
 じや(婆)なんだ此女中のさもしいの非人のと知れた事わしや乞食だ其乞食が此村大炊之助  
 さまのお屋敷と知つて來たのだ娘に逢たいく(神)エ、むさい形りをして慮外千万御門外  
 へ出やらぬか(吳)殊に此村大炊が屋敷と知つて娘に逢度とい合点ゆかねシテうちが娘  
 といふ何者じや(婆)アイ我が娘といふ久次さまとやらに請出されて茲の屋敷へ來て居  
 る九重どの(吳)ヤア九重どの、母親とや(九重)何私がか、さんとい(婆)ヤアそんならそ  
 なたが九重かなつかしかつたくわいの(久秋)誠に幼より癖に勤め親の行衛もしれぬと有  
 ばもしや成る非人の老女そなたの實の母やらん去り乍こりや老女そちが娘といふにいな  
 んど慥な證據が有か(婆)證據がなふてわいの現在のわしが娘生れた月日をよふ知つて居る  
 是が證據さ(久秋)シテ其産れた年月日時(婆)年号の天正元年戊辰十二月十日卯の刻の眞  
 生雅名の園といふたで有ふがの(久秋)スリヤ愈々なたの彼が娘か吳竹御葉(吳)我君さま  
 (久秋)ホイト此時久次出て(久次)弟久秋(久秋)ヤ兄上さま(久次)うちや乞食の娘と言替し  
 たな(久秋)スリヤ最前からの此様子(皆々)おなたさまが(久次)何もかも皆聞た奴共參れ  
 (四人)ハ、アト奥より奴四人跡より矢田平付て出て來り下へ扣へる(四人)御用でござりま

そるな(久次)如何にも久秋九重夫なる老女諸共繩をぶて(奴)ハット立掛る最前より矢田  
 平出掛り居て此時(矢田)奴ども待(奴)ハッ(久次)矢田平身が詞を背き其方が止めし(矢  
 田)ハッ憚り乍此入譯の此奴めに御預けなされませ非人と御縁を組れて久秋公へ繩かけら  
 れんと有のそりや貴君様の御詞が相違致します其譯と申の是に立て有る高札をよもやお  
 忘れのなされませまい此様な高札を立られ乍御口説なされた久次公こりやあなたから繩を  
 かけせば成ますまい(久次)なんと(矢田)ハ、一應も再應も下郎めがどつくりと承つた上  
 繩掛る成と首を刎なりと遊ばしたがよくござりまそる(久次)スリ其方が此實否を(矢田)蛇  
 の目をあくで洗つたやうに蛇皮捌いて見せませうと婆の側へ來て(矢田)コリヤ九重殿のお  
 ふくろ一寸お目に懸りたい(婆)アノわしが事か(矢田)いかにもコレ母御こなたの方より何  
 ぞ證據が(婆)ハテ知れた事娘が産れた年月日時(矢田)知れてござらば今一應承りたい(婆)  
 エ、しつこい事よいの開度ばいふて聞そふが年号の天正元年戊辰十二月十日卯の刻の眞生  
 (矢田)九重どのアノ通り覺へがござるか(九重)さいなア常々肌身放さぬ此守りにト懐へ手  
 を入守袋なきこなし(矢田)どふぞさつしやりましたか(九重)さいなア大事に掛て持て居た  
 守り袋がござんせぬわいなア(矢田)何だ守り袋が見へぬト婆に目をつけ(矢田)有まいく  
 トこもし有て(矢田)時に尋升うの九重殿に右のまなじりに蕪が有るが夫を知つてか(婆)  
 ヤ○成程くちいさい時の夫をいかふ苦にした蕪じやが成人をれば其機に目に立ぬ物じや

のう(矢田)いかさま親子とて争われぬもの目元なら口元なら九重殿に生寫しじやはて此様な形りでござればこそ衣裝立派にやらかしたらア、よい女房で有ふわいの(婆)イヤモウ其様に乗せられていふじやないが年より余ッ程ふけて見へるわいの(矢田)更けて見へるく(波)はんよ此やうにしみたれで居ればこそ相手に成手がないがわしが今年で調度三十一に成わいの(矢田)なんだ三十一だ(婆)ヲイのう(矢田)成程三十一位に見へる時に聞ふの九重どのの天正元年の産れ今年で調度(婆)娘の十九(矢田)こなたの今年で(婆)三十一さ(矢田)十二の年に産た子か(婆)ヲイのうト必付(婆)ヤアト悔りせる(矢田)茲な大かたりめが(婆)ヤイ茲な奴が九重が母御さまを何でかたりとぬかすのじや(矢田)コリヤやい九重殿のお袋かヤレよふ似たと乗かけて附込めば誠と思つてうぬが其面ヲコリヤやい九重殿の右のまなじりに驚が有といへばちいさい時の苦勞にしたが大きく成ば目に立ぬとぬかしたがかたりの正銘コリヤうぬの仕事をこしらへて九重殿を連れてのこふと云巧みか但の外にかとふどが有で有ふがなト婆を引付ける懐も守袋を引出と(婆)それをトかゝるをとつて投(矢田)覺へがござるかト九重が方へ投る九重取上げ(九重)本にこりや私が失ふた守りじやわいな(矢田)扱こそ何時の間にかやらちよろまかして九重殿の母御といふよ排へ事仕ろいだなユ、茲な盗人婆アめ(婆)コリヤもう堪らぬわいのト逃出すと矢田平捕へ(矢田)詮義が有るじつとしてうしやアがれト踏付る(奴四人)部屋頭出来ました(矢田)コレわいらの此婆アめを引く

れ(四人)ハア年寄ヲモウよい加減に(矢田)ハア引く、れといふに(四人)おつと合點だト四人の叙述を棒縛りにせる此時矢田平高札を引抜其裏へうこに有る硯箱の筆をとつて手早に書印して(矢田)幸ひの此高札こいつが悪事の覚増を書印したの直に捨札命助けてやるがまだしも奴共こいつを御門前よりばつ拂へト高札を婆アが脊中へ差突やる(婆)ユ、いまくしい折角うましくいつた物を(矢田)オアあゆまねへかト矢田平附て奴婆アの腕を取り向ふへ遣入上使と呼ぶ太鼓謠に成り向ふより小早川高景長上下にて三寶に白梅の枝に短冊を付是を持麻上下の侍三人付出る久次の二重舞臺に住ふ奥竹出向ひ舞臺へ通り上へなをる(久次)異國せいばつに趣し高景心得ぬ上使とい(高景)成程異國征伐加勢の爲故地へ趣し所に去り難き子細有て立歸りしも國家の爲先の久次公の御機嫌の御尊顔の拜し恐悦至極に存じ奉りませるヲ此家の主じ大炊之助殿に如何召れた(奥)夫ト大炊之助御出迎ひ申ませる筈なれども風邪に冒され引籠り罷り居りませれば御上使の一通り此奥竹に仰聞られ下されませうなら有難ふムりませる(高)スリヤ大炊之助殿に何所勞となト持參の梅ナ枝を久次が前へ差置(高)其梅の下木を持って久次公へ三ツ條の御咎め(久次)ヲ其子細の(高)今四海おだやかならせ上み一人より下モ万民の歡き然るに久吉順を以て逆を打國家統と安んせると雖も久吉齡い傾く迄の久次を以て跡目相続すべき所生得御跡竟々しく殊にの多病を以て久秋を跡目たるべき旨申出シ桃山宣下の折から狼りに踏込み法度とこない禮を破る是か

答めの第一(久次)だまれ高景兄を差置弟に世をつがすべき聞れなし何を以て禮を盡るとい  
 (高)左程順道の辨へ有御身にて異國より渡りたるははん人となア御荷儀なされしな(久次  
 何がなんと(高)證據と申し繼目の御太刀最前の御催促をいのみお渡しなきが儘な證據さ  
 (久次)サアうれい(高)右三ヶ條きつと承り参られよと高景を以ての上意此御返答が承りた  
 い(久次)サア其義の(高)御返答が承りたふ存まると此時奥にて(大炊之助)其返答此村大  
 炊之助それへ参つて仕るでございませうと管弦に成り大炊之助上下衣裳にて出て来る(高)  
 スリヤ其許が三ヶ條の申開きを致さるゝとな(大炊)元より久次公に他家より御入りなさ  
 れしとの申乍兄君たれば跡目に立が世の順道併シ乍生得御正直成るお産れ故義理有る中の  
 久秋公を思召し態と御身持御放蚌のコリヤ我君の御仁心と存まると(高)藤泰張義が辨を以  
 てかざる共遊れぬ證據の異國より渡つたる謀反人に御荷儀有し是第二の御答め(大炊)コハ  
 ござやうくしい仰せシテ夫に何ぞ儘な證據ばしむるかな(高)證據といふの世の取沙汰  
 (大炊)世の取沙汰を以て證據といハト久吉公に御似合されぬかと存まると(高)天に口  
 なし人を以て言ひしむる周南召南の國風皆證據に成るでござらぬか(大炊)夫こそ唐人の  
 騙れ事是ぞといふ治定の證據なくして謀反人とい申されまい(高)治定の證據の繼目の御太  
 刀御催促をいのみ御渡しのみなきが儘な證據さ(大炊)是逆も先達て久吉公名古屋御發向の折  
 から手づから譲り置れた御太刀譬へい他の者如何程望めばとてうかつにお渡し有べき答が

ムらぬ(高)父母に背くと天地に背く上意を背くいなんと不孝で有まいか一旦の得心にて又  
 候惡心起るの治定所詮助け置ての万民の歎き切腹致させよと有る久吉公の御内意なれば叶  
 わぬ趣と思召御最期の御用意召されいト久次きつと成て(久次)サア推參なる高景最前より  
 聞て居れば様々とのたわ事モウ此世の我心次第四海の跡目の此久次と立歸つて言聞せろ見  
 るも中々穢らわしいト以前の三寶を蹴返と管弦に成り思入有て奥へ還入(高)サア法外なる  
 振舞久吉公の上意なれば我君と同前イテ引くゝつて御殿へ引トせつと立て行ふととる大炊  
 之助こなし有て(大炊)サア暫く〇奥竹其方の奥へ参り久次公の守護致せ(奥)畏りました  
 (大炊)サ、早うくト奥竹こなし有て奥へ還入る(大炊)役目の役目朋友の朋友願ひと其  
 子細の唯今三ヶ條の申譯立難く殊にの日數今日限是非に及ばせ御切腹のお進め申御首を給  
 せらんが何卒御上使の御情をもちまして貴殿御持參の此梅の一枝とこ許様の情にて無理に  
 咲すな無理に咲そ室の早咲(高)久吉公の御賢慮の切て捨たる花の兄無理に咲とる手段にい  
 かに(大炊)茲を切れと言ひの計りや梅に譬へし久次公の御身替り(高)古も試し有多田の彌  
 仲の忠臣仲光が忠臣〇其仲光に幸壽あり久次公の御身替りに立べき幸壽の(大炊)其身替  
 りの此梅の美さ(高)サ(大炊)サア花の身替り言ぬ心を推量有て(高)ハ、ア遊れ成花の身替  
 り造り花とい知り乍手折て歸るも武士の情御臺所の御心庭汲みて知れとの其短冊ト大炊之  
 助梅に付たる短冊を取て讀む(大炊)忘れても涙やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水(高)

六ハの玉川の其内高野の奥の玉川の毒水空海上人の汲んを悲み忘れても汲やしつらんと毒有事を知らせの一首(大炊)切腹させよと有久吉公の嚴命忘れても毒を呑なと圍生の方の情の古歌(高)高野の奥へも身を退き剃髮染衣の御姿ともなし奉らば夫こそい優曇華の花七寶の玉の臺の玉川の水(大炊)流れの同じ忠臣と情け(高)濁る心の玉川か(大炊)ニツの思案の奥の間で(高)梅の返答(大炊)短冊の謎ト高景梅ヲ枝を取上げ(高)茲を切れと云ぬ計りや梅の花(大炊)高野の奥の玉川の水(高)とつくりと思案を召れト唄に成り高景こなし有て屬に梅の枝を乗せ是を以て奥へ這入大炊之助短冊を見て色々思案して居る合方向ふより矢田平戻つて來て大炊之助が様子を見て思入有て(矢田)申お旦那(大炊)そちらの矢田平か(矢田)只今の様子殘らぬ承りましてござりませぬ久次公の御首を打て御渡し有ての貴君様が是迄の(大炊)コリヤ〜そりや何を申そち達が存た事でない扣へて居い(矢田)サアそつぱりと御切なされませ(大炊)ヤ何と(矢田)最前高景様のお詞御談合なされし花の身替り大將人頼と下寮奴の一文首お月さまと泥龜程違つても性根玉の劣りの致さい是非奴めが首討て久次公の御身替モッお旦那(大炊)ハテ幼少より側近ふ召仕ふた者程有てしはらしい健氣な一言コリヤ矢田平最早身替りに及ばぬわいの(矢田)アモ旦那のお身の上是非共下郎をお身替りにト切腹仕よふとぞる大炊之助是を留て(大炊)コリヤ死る計りを忠義とい言ぬのやい(矢田)ソツ御上使への御返答の(大炊)何事も身が胸中(矢田)スリヤお旦那の御胸中

よ(大炊)ハテ花も實も有ト矢田平へ言ふとして氣をかへ橋を見て(大炊)橋の盛りじやなアト唄に成り大炊之助こなし有て奥へ這入上の障子寮体より高景出掛り居て(高)名を聞て又見直すや草の花ト矢田平振返り立留りて思入有て又行ふとぞる(高)コリヤ〜待(矢田)チイ貴君の御上使高景様(高)用事が有是へ參れ(矢田)チイ〇何御用でムりませぬ(高)面ヲを上げい(矢田)ヘイ(高)名の何と申(矢田)ヘイ矢田平と申ませぬ(高)ハテ矢田平じやよなト唄に成り高景障子をしやんとぞる矢田平呆れた顔にて下座へ這入る此時ばた〜に成り奥より久次久秋を引附出るを奥竹是とさへる事有て(久秋)御尤なる兄上の御詞最前貴君を欺さし此上もなき不届者御立腹の御尤兄君此久秋を存分に遊ばされませいと久次振打に切付る立廻り此内奥より白無垢水上下にて二寶に九寸五分と短冊と乗せ是を持てつか〜と出て來る久次を隔てしやんと見得(久秋)ヤアそちらや此村大炊之助思ひ寄さる無紋の上下を(呉)其か姿の(大炊)梅の身替り斯の仕合せ(高)久次公に成替り申譯の切腹さか(大炊)御上使先々あれへト高景上へ通る(久次)ム、スリヤそちらが我に替てト大炊之助久次を見てとつと思入有て(大炊)エ、こなたのう其お心を改めんと預り歸る其日より様々との御諫言何卒御心を改めんと身受せられし傾城まで此館へ引入置しに少しお心を和らさやうと思ふ違ふ貴君の惡心弟公久秋公の思ひ物夫を御存有乍邪非道の御難業の名將と呼れる久吉公の御嫡男久次公の御身持かいの夫に引換久秋公にの懸み深く所詮直らぬ性根と見込

み高野の奥に身を退れ出家なせよも殺して生を御情の仰此大炊之助のこなた故に命を捨て  
 の御諫言是皆こなたの爲ならずや貴君の科を此身に引受切腹致とい更々命の惜みませねど  
 何卒こなたを能大將に仕立腹切る命を戰場の討死か忠義も捨る命ならにつこと笑ふて死ま  
 せらわいの一旦大炊が切腹にて御身の命の助らんが終に君の御怒り母御の情も綱も切れ  
 切腹で済ばまだしも六條河原の敷卒よてせまじき最期を成さる、時の犬狼や鷹鳥のまじき  
 さらしまそわいの思ひ廻せば廻と程御身の成り行き心もとない何卒御母公の御詞に随ひ身  
 を黒染と染なして善心に成て下されい我君イヤサ久次公(久秋)誠有大炊之助が今の一言此  
 久秋だに無きらば跡目に極る久次公かゝる歎きも有まいに唯儘成ぬ世の盛衰夫に付ても此  
 村大炊命を捨ての此場の仕義遣れ忠義の武士じやなア(吳)申高景さま御上使のお情にて久  
 次さまの御身の治り夫の命も別條なき様仕様もやうもないかいなア(大炊)ヤア未練なやつ  
 の上使の目通り扣へ居らぬか(吳)夫でもあんまり(大炊)扣へておろふてト急度いふ是にて  
 吳竹思入有て久次が傍へ寄て(吳)エ、茲な大悪人さま言ふまいどの思へども夫との最期も  
 みんな貴君の御心からエ、恨めしい御主人さまエ、こなたのう(久次)ヤア久次に向つて  
 目に角立ての其一言慮外者めが(吳)アイ慮外合点御手討に逢ふも承知夫との最期と極る上  
 いわたりや更々命の惜まぬ切られたい死たふとさんそエ、恨めしい大悪人の久次どの(久  
 次)重ねのの難言くたばり度バ殺してせらう 次が詞に違へば親でも母でもまつ此通

ト抜打に吳竹を切下る(大炊)スリヤ如何様に御諫言申ても(久次)いつかあゝひるがへら  
 ぬ(大炊)スリヤどの様に申ても(久次)くどい先久秋からトかゝるを大炊之助さゝへる久次  
 刀を抜切て掛る大炊之助此手を留て(大炊)モウ是非に及ばぬト持たる刀を打落し前なる九  
 寸五分を取て久次が腹へ突込む(高)大炊殿威心仕つた〇暫くお扣へ成さいト久次が疵を能  
 々見て悪人なれど主人の片われ是非もなき此御最期(大炊)然らば此儘お歸へ(高)御見送り  
 の此高景(大炊)御上使御苦勞(高)お別れ申そふト唄に成久秋先に高景付て向ふへ運入跡合  
 方大炊之助邊り見廻シ久次が傍へ來り(大炊)我君様今日只今よりして四海の武將ハ久次公  
 千秋万歳お目出どふ存じませると此聲に久次苦痛のこなし有て(久次)ヤア心得ぬ大炊之助  
 此久次を諫初に似ざる此体ハ(大炊)必有て突貫し九寸五分養生の家に傳る良業あり切腹ト  
 見届歸りし上の心の由断を幸ひ根組を固むる君の大望(久次)そちが一言満足せり觀乍らも  
 久吉を亡し四海の武將ハ此久次(大炊)ホ、チ廻れなる御一言君一戦に及ぶとも敵何万騎有  
 共物の數にて數ならせ軍配探て下知なさバ勝利有んハ目のあたり旗下に随ふ勇士の豊併し  
 眞柴の御旗なくてハ(久次)氣遣ひ致そな大炊之助先達て家に傳る旗の旗笠取て服身放さそ  
 ト懐より服紗に包し旗を出そ大炊之助是を取上(大炊)何旗の御旗となどれト見てにつこと  
 笑ひ(大炊)旗の旗我手に入からハ此村大炊が日頃の大望成就なとべき時至れりアア悦しや  
 なア(久次)ハテ心得ぬうちが一言大望成就の時節到來なしたりと申せし詞探ハ故も本名有

る嗚呼の者ヲ又おことが俗姓の(大炊)語り聞さん真柴久次(大炊)ヤ、何と、是より敵の合方に成り(大炊)我元來此日本の者ならん大明國十二代神宗皇帝の左將軍宗蘇卿といつし者成りしが真柴大領久吉に我領地を切取られ剩へ順南太子をとりこにしられ無念こつすいに通て止事を得ん何卒恨を散せんと思ふ其内唐士に於て蘇友といへる一人の子を設け乳人に預け我の此土に押渡り筑前箱崎に世を忍ぶ内又もや一人の女に語り二人の子を設け唐と日本に三人の實子有又逢ふ時の印にと蘭奢の一本を篋に殘し別れしより蘇友の今此日の本に渡りしと聞彼を守立四海の武將に爲ん目のあたりまつた我に往へし順喜親といへる臣まつた石川五右衛門といへる隨身の者心を合せ事を計るに大領久吉是を知き我を誠の忠念と思ひ大録を與へ其方を預け置の石と抱て淵に入の道理何卒真柴の家を亡とならば我存の臣晴る、道理瓢の旗其方が隠し持と知つたる故計略を以て我手に入れし上柄の此旗を破却あし再び真柴の家断絶深手の久次所詮存命及びも無事此上の其方が企も我大望も一ツになし久吉を失ん是を未來の土産となし成佛なせよ真柴久次(久次)探ひ此村大炊之助の大明も宋蘇にて有たよなト大炊之助思入有て突込し九寸五分をニイと正面の腰額へ打附る仕掛にて額落る塗炭漢字を書し白指下る是と一所に大炊之助有合件ノの旗と火鉢へ打込ひ掛をんせうばつと立大炊之助件の白指を取上げ(大炊)江北一棟の枳江南一棟の橋ト此時運寄を打込ひ是にて大炊之助ツカ、と花道能所遊行見傳(久秋)都て金鈴を欠扶養に憂る謀反の

報本大明の宋蘇卿最早退れの覺期なせ〇ソレ者共(捕手)ハア、ト花四天六人揚幕より三人下手より三人餘をかまへ出て花道へ取巻是にて上着のけて唐裝束に成り花道より舞臺へ來り投のけてきつと心得の思入(大炊)今切腹なせし久次がいつに替らぬ此休の(久秋)墨や大炊汝が俗性見出ん爲切腹と見せしなまつかな偽り(大炊)何と(久秋)鉄も及ばさたへれば黄金も勝る譬へ生得短慮の此久次又久吉名古屋發行の折柄仰せ置れし一條此村大炊が人相骨柄我朝の人物にあらじ名を包みこび詔ふの大望有物と見へたり先斯々致せよとの見出し置父君の御眼力兼て高景と申合せ汝が陰謀見顯す計略にて一命捨しと見せし今ぞ願を是を見よト久秋懐より血に染し鶏を出し見せる大炊之助見て悔りなし(大炊)ヤ、我はん慮も落入しと思ひしに返つて我に計られしかシテ我素姓名乗らぬ先より久吉が宋蘇を知つたるか(久秋)夫こそ高景が先達て異國加勢の爲出船なしたる所難風に吹流され空海へ吹寄られ不思議に手に入る此一品ト陣羽織を出し江北一棟の枳江南二棟の橋金鈴を掛扶桑も憂る大明の宋蘇卿と申たるの唐士に一人の倅有江南二棟の橋とい日本の二人の倅有唐より此土へ渡り日の本をくつがへし日本の倅を世に立んとせる謀反の張本まつた一人のかとふどの順喜親といふの下部の矢田平で有ふがな(大炊)矢田平を順喜親と知つたるのこし元伏屋といふ入込みし小西が妻の唐織が高札の文字より露顯成りかく計らいしも高景と申合しあり最前渡せし瓢單の旗のまつかな偽物成り最早退れの覺期に(皆々)覺期なせト早も合方



に成り捕手鎗を突て懸り立廻り有てト、大炊之助正面上みより返しかべに飛込ひ掛まんせ  
う立せろくにて皆々是のとなし有て幕

本舞臺一面の唐家体前側一面純張を卸し幕明く

ト直に床の淨瑠璃に成り上るり「百拜千慮様々に知略をめぐらそ宋蘇卿裝束美々しくもう  
せんと香爐にくゆる名香の薫り床しく聞へけり透を伺ふ双方より突出と鎗先動ぬ不敵ト此  
文句の内以前の花四天上下より伺ひ出大炊之助を目當に鎗を目先へ突出と(四人)覺期ト大  
炊之助是を見て思入「又突掛る鎗首擲蹴飛す勇猛頭でんと追立られて軍兵共ひらくば  
つと遊散つたりト又突て掛るを拂ひのけ花活の桐を取て提のける是にて掛まんせうハツと  
立四天うんと目くるめいて遊て遁入遠寄に成り(大炊)間近く聞ゆる貝鉦太鼓の敵押寄ると  
覺へたり雜兵の手に掛り死後の耻辱も残念速に腹切て我子蘇友よ此無念告知らさんそふと  
やく「心靜に立戻り名画の一軸にきつと目をつけた邊りを見廻し鷹の掛物に心付「段宗  
皇帝名画の鷹其ためしなきにしも非ぞ(大炊)黃鶴仙人の鶴に乗て自在に空中を飛行しまつ  
た漢の世の蘇武の胡國に捕われ無事を古故に傳へる厂のためし日本にての天武天皇吉野山  
にて名香を焚琴を弾じ玉ひしかの果して天人あま下りたる例も有我生血を持て蘇友が方へ  
ム、「有合ふ器手許に置小柄につんざく小指の血汐器にうつし筆に染服紗の衣に漢字の筆  
法無念の性血逆意の遺書心を込て書終り裝束くつるげ劔引拔諸手を掛て無念の息ぐつと突

込むゆん手の脇腹さりとくと引廻と(大炊)南無十方金剛菩薩爾時毘沙門天王毘樓勒及天  
王提頭頼吒天王毘樓博及天王我宿望を納受有て徵宗皇帝が雲筆の鷹に魂魄入て蘇友が許へ  
我憤死を告知らせ下さるべし南無殖伽阿側與諸比丘無量天人大泉俱寄妙頂來く「鷹勝を  
擲で打付る目當の画面の班の鷹時に怪しや羽たゝさして己を抜出一散に雲井邊に飛去りし  
一念の程ぞ恐ろしき(大炊)アヲ嬉しや悦ばしやなアト鷹を見て嬉しき思入鷹を向ふへ引て  
取「悦ぶ有様こなたより何ひ來たる下部の矢田平トバたくと向ふより矢田平走り出右  
の鷹を見送り乍舞臺へ來り此体を見て悔り思入(矢田)ヤ、御主人様の此体ハト下手にこな  
し大炊之助見て(大炊)順喜觀無念ないやい(矢田)スリヤ御最期で有たるか我一人跡に残つ  
て何とせん此場に於て追腹致さんト腹を切らふとせる大炊之助留て(大炊)ヤレ待今死る命  
を長らへ悴蘇友に此無念を告知らせよ(矢田)御意でいさされど御幼少にてお別れ面体知ら  
ぬ蘇友様(大炊)サ是を割符に尋ね得よト鷹の抜たる掛物を苦痛乍ら取て提出せ是を取て見  
て(矢田)コリヤ是白紙の掛地扱の今飛行し白羽の鷹の徵宗皇帝の名画にて此画衣を抜出て  
御大事を知らせしよな(大炊)巡り逢なば斯と知らせよ(矢)ハツト是にて大炊之助落入る矢  
田平捕手を相手に切結びトヤ上手にて(高)ヤア大明の順喜觀へ小早川高景ト向ふにて(久  
秋)眞柴の同府久秋今更めて見參(兩人)見參(矢田)何が何とト以前の久秋高景軍兵大勢附  
出て來り(矢田)ヤア合点の行さる久秋とい、高景の此体ハ(高)ハ、サ不審お尤此家の主此

村大炊之助との偽り誠の大明の宋蘇卿(久秋)夫に随ふ順喜親汝が俗性見出ん爲(高)得より  
 悟りし此高景最早露顯なす上の(久秋)サア尋常は白状いたせ(矢田)ナエ、口惜や残念やス  
 リヤ高景が計略にて御主人の手に入りし瓢の御旗も偽物にて久秋の落命も我々主従を見出  
 さん爲で有たよなよしし此上の此順喜親が死物狂ひ片ツ端から觀念なせ(皆々)何をこし  
 やくな(高)ヤレ待旁今討取ん安けれと逆心なれと天晴無双の忠臣のまはにめで此場の一  
 先見退しくれん(矢田)スリヤ我を見退し下されんとや道の高景敵乍情は及向ふ及いなし  
 且此場の別るゝとも(高)又の再會(皆々)戦場く(久秋)まづ夫迄の(高)順喜親(矢田)久  
 秋高景(皆々)去らばトカケリにてよろしく

幕

金門五三桐

五立目

南禪寺山門の場

一 石川五右衛門

一 羽柴久吉

一 奴 矢田平

一 組子 六人

本舞臺一面の煉塀上の方へ石の井戸其脇へ詠の岩繩釣瓶仕掛にて道具納る

ト下座より六人の組子銘々階子を持伺ひ出て叫き合ひ左右に忍ぶ此時正面の塀を切り破り  
 奴矢田平掛地を持抜刀にて窺ひ出て思入六人やらぬと掛る賑なる鳴物よて大立ありト六  
 人を相手に切り散し井戸へ掛り水を呑み息をつぐ此内どんちやんわりや／＼の聲見合能所  
 にて組子亦掛る是を切り散し矢田平ゆ／＼と向ふへ這入るとん／＼にて塀を上へ引上る  
 知らせに付黒幕を切て落と

本舞臺京都南禪寺山門の体二階の高欄もたれ石川五右衛門烟草を吞居る見得にて道具納  
 る

(五右衛門)春の詠の價千金とち、さい譬へ五右衛門が爲に此價万圓最早日も西に傾き  
 賊に春の夕暮暮の櫻も一入／＼ハテ麗な詠めじやなアトとる／＼よて前の鷹向ふより飛で  
 来て山門の高欄に留る(五)ハテ心得ぬ此鷹の我を恐れず羽を休るハト能々見て(五)正敷是  
 の名画の筆勢かも知らんトこなし有て鷹を押へ右のくわへし服沙を取る鷹日覆へ舞上る是  
 を見送つて右の服沙を開き(五)コリヤ是此村大炊之助が手跡殊に血沙を以て認めしハテ  
 心得ぬトよく／＼見て(五)何々其方某兼て示し合せし通り久次をおとりに四海を掌握と計  
 りし所反つて久秋高景が計ひに依て年來の大望空敷無念の最期を遂る者也ト讀で驚く(五)  
 スリヤ此村大炊の事願れ早生害とやホイ死後に願置一義某元の大明十二代神宗皇帝の臣下

宋蘇卿と云ひし者本國に一子を殘し日本をくつがへさんと此土に渡り兄の計略に依て人手  
 に渡し妹の足手纏ひし乳人に預け唐と日本に三人の子供只心掛りの唐士の兄我を慕ふて日  
 本へ渡りしと祖聞と未だ對面遂に此悻強猛不敵の生れ付箇に添へし蘭奢待といへる香を證  
 據に何卒尋ね出し我が無念を語り力を合し久吉を討取て修羅の忘執を散じてたべト讀み思  
 入有て(五)スリヤ此村大炊之助と云ひし我が父宋蘇卿殿よて有りしよなム、ナエ知らぬ  
 事とい云ひ乍殘念／＼○我雅き時風波を渡ぎ此土へ渡り何卒父に對面遂げんとさまよふ内  
 明智光秀殿の養育にあづかり成長して惟任左馬五郎と呼ぶ然るに明智光秀氏のおだに春永  
 父子を討取り四海を掌握とると雖共僅三歳大領久吉が爲に亡され無念の御最期其恩義を請  
 じ我あれば光秀殿の吊軍久吉を討取らんと討死を止り世を忍んで今石川五右衛門と名乗る  
 處に國で別れし宋蘇卿殿も久吉が爲に計らず落合ひ無念に無念を重ねる仇エ、返と／＼も  
 殘念なり是迄心を尽せし大炊殿も父とも我を子とも知らぬ暮せし親子の心外鷹の知らせ  
 に無念の骨肉父の筐の蘭奢待も親子の割符に所持せしに御存命の内ハ空敷死後の筐となつ  
 たるかナエ、○かのれ久吉父の無念に光秀公の恨み譬へ此身油で煮られ肉のとろけ骨の一  
 々砕けても此無念晴さいで置ふか思へば／＼殘念やなアト是にて鳴物に成り此山門せり上  
 げトより久吉順禮の拵へにて出て上を見込思入有て(久吉)石川や濱の眞砂の尽るともト上  
 にて五右衛門心得ぬと下を見て(五)何がなんと(久)世に盜人の種ハ尽まじト五右衛門さつ

と見て(五)エイト小柄を手裏劍よ打つ久吉柄撥にて請留め(久)順禮に御報敵トきつと上を  
見上る五右衛門きつと見得兩人宜敷  
ひやうし幕

明治廿二年五月十四日印刷  
同 六月廿四日出版  
版權興行權 所有

定價十錢

相續者兼  
發行 者

著作者故並木五瓶男  
並 木 各次郎

京橋區築地一丁目廿三番地

印刷者

木 村 隆 次 郎

京橋區加賀町由巳社内

賣捌所

歌舞伎新報社  
京橋區銀座四丁目十六番地

